

7. 次年度以降の取組の方向性

- ① 学校運営協議会の動きをさらに発展させて、地域学校協働本部の設置に向けて組織改革を行う。学校運営協議会の委員構成を変え、校長のリーダーシップの元、意志決定機関の位置づけ、学校運営とその運営に関する必要な支援に関する協議などが行える組織運営をめざしていく。構成員を見直し、各種団体からも参画していただき、より、広く、学校運営に関わっていただけるような地域学校協働活動をめざしていく。また、地域学校協働本部の設置にむけては、現在の学校運営協議会メンバーがスライドして新しい本部の地域学校協働推進員の構成員をつとめていただき、地域の諸団体とさらに結びつきを深めていけるような大切づくりに努める。この改革と同時進行して、能勢町でこれまで長年活動を行ってきた東地区と西地区にある二つの地域教育協議会を1本化して、一つの組織にしていく計画である。生涯教育課で行っている様々な企画があるが、似通った行事も多いことから、学校運営協議会と地域教育協議会の連携・協働による取組を進めていきたい。
- ② 学校が困っていることを学校運営協議会が受け皿になってつなぎ、授業支援、業務改善サポート家庭教育支援を行っていききたい。特に能勢町が他地域より進んでいる「家庭教育支援事業」（ほっこりチーム）を活用して、様々な家庭環境にある児童生徒をサポートできるシステムによる取組を福祉課と教育委員会が連携して進めていききたい。特に能勢町では、アウトリーチの訪問型家庭教育支援事業を平成29年度から実施している。家庭教育支援員8名が、年長児から小学校5年生まで年3回、全戸家庭訪問を展開している。（次年度は6年生まで拡大）この訪問型家庭教育支援事業を、学校配置型の利点を生かせるような活動をめざし、両者の長所を生かせるような能勢版の家庭教育支援事業に展開していくために、学校教職員の制度理解を進める取組を始めていきたい。
- ③ 中高一貫教育の研究体制を改編して次年度は2年目になる。テーマ別の9グループが今後どのような研究の展開を見せてくれるかが楽しみである。今年、研究発表会で研究授業を行った4つのグループと展示発表を行った5つのグループが、今年の成果と次年度に向けた取組の方向性を書いている。（資料：小中高一貫教育研究発表会 冊子「グローバル人材の育成」P13～P21）引き続き、高校と町行政が行う連続講座を継続したい。また、高校生・中学生がもっと町の中で活躍できる機会を1つでも作りたい。防災等の切り口で、中学生や高校生が、町にとってかけがえのない存在（労働力、体力、知力、ネットワーク、若さみなぎるエネルギー）となって、町民からも信頼される存在になれるようなプランの作成に努めたい。
- ④ 次年度、能勢高校が完全に豊中高校能勢分校になる（1～3年生まですべて分校生）。一方で、大阪府立学校条例の再編整備のルールが存在する。能勢分校の存続のために、様々な取組が必要となり、府も町も汗をかいて、高校教育の機会均等と高校教育の保障、そして、何よりも生徒が行ってみたい高校になれるように、高校魅力化を図っていかなければならない。そのためにも、高校生が町で輝く機会を作り、地元高校に通う生徒が町の人に一人でも多く評価され、町にとって高校はなくてはならないという気運が益々向上することを期待する。そのために、能勢町教育委員会が大阪府の高校再編整備課に働きかけながら、能勢町首長部局とも連携協働して、能勢分校が発展していくように努力していききたい。
- ⑤ 職場体験学習の受入先は、町内事業所が約80%。地元の企業、公共施設など、能勢町のことを学ぶ機会が多い。ただ、職場体験学習に至るまで、また、体験後の中学生の生き方、将来への展望など、キャリア教育の視点から、職場体験学習そのものの充実をさらに図っていく必要性を感じている。町内のまだ開拓されていない事業所、カフェ、レストラン、公共施設等への新たな展開を模索する。また、4日間だけの取組に終わるのではなく、職場体験先についても、もっと生徒自身の生き方にせまるブレ学習を行い、事後で自分の夢に向かって将来の方向性を考えていくプロセスや進路選択など、個にせまる機会はまだまだある。能勢の素敵な大人ともしっかりと出会い、自分の可能性に気づいてほしい。また、地域の暮らしの豊かさや能勢の方々の心情にも触れて、もっともっと、能勢町に目を向けてほしい。
- ④ 大阪経済大学と能勢町の連携では、昨年度から様々な取組を重ねてきている。今後、教育委員会だけに留まらず、他部局とも連携できるような新たな展開を図っていききたい。オノマトペ体操の継続はもちろんのこと、運動×勉強。つまり、オノマトペ×勉強＝オノベンにも取り組み、体力を向上させながら学力の向上にもつなげていきたい。また、大学の資源を活かしながら教育×健康×防災、つまり、小中高×長距離の歩行×防災×地域の人々のような、歩くことで防災を学び、自治会とのつながりをもった防災を考えるイベントなどの開催など、多角的なプログラムを創出していききたい、そのためには、他部局連携ができるネットワークを築き、町に1つしかない保育所、幼稚園、小学校、中学校、高校の強みを生かした地域学校協働活動を展開していききたい。
- ⑤ 自然環境保護団体、NPO、自然愛好家、みどりのトラスト協会、理科に詳しい退職教員などと

の接点を作り、小学生や中学生の授業と連携し、幼児が博物標本を見にくる機会を作るなど、標本を活用した事業展開も伸びしろのある業務として期待できる。また、その制作に立ち会えるという機会を大切にして、能勢の自然の素晴らしさを丸ごと体験できるようなカリキュラム・マネジメントを行い、幼児から高校生まで一貫して学ぶべきものとして、教材化を図る必要性がある。

- ⑥ まずは、中学校のキャリア教育、総合的な学習の時間を活用して、地域とつなぐプログラムをさらに発展させていきたい。保幼小の連携協働は、能勢っ子！かけっこ！日本一！を中心に取組を進めていく。今年、連携してきたことをさらに次のステップへと浸透させていく。中高の連携プログラムは、基本的には中高一貫教育をより充実させていくことが肝心である。そのためには、中学生×地域、中学生×防災、中学生×ボランティアなどの視点を今ある中学校の総合的な学習の時間のカリキュラムに位置づけ、系統性のあるカリキュラム・マネジメントを進めていけるように、近江正隆さんや本間莉恵さんの講演会やワークから見てきた課題について「能勢スタイルの地域学校協働活動」の構築に向けて具体的な実践を創出していきたい。